

第一問

次の本文を読んで、以下の設問に答えなさい。

考えることはもとより論理的なものとみなみであるが、同時にかならず倫理的な実践でもある。倫理的な構えがなければ、すなわち他者に通じさせよう、他者と思いを共有しようとする意志がなければ、論理は成立しない。論理とは説得への意志であり、普遍への意志である。論理とは他者の承認なしに満足できない人間の自己の欲望に動機づけられていると考えてよい。

幼児と暮らしたことがある人ならだれでも、その存在のあきれるほどの身勝手さに思わず笑ってしまった経験があるはずだ。自分がかまわれてさえいれば満足、ちよつとでもこちらの注目が移れば無理矢理に引き戻そうとする。おとなの会話のなかで自分が話題になつていくかどうかを敏感に察知する。しかしその身勝手さに他意はなく率直きわまりないから、むしろ微笑ましくも感じられる。

またいかなる暴君であろうと、強大な暴力だけでは支配を ^⑦カントツすることができない。なによりも暴君自身が人民の承認を希求している。むろん自発的な承認である必要はない。大規模に動員された承認の儀式があればよい。そして二十世紀の絶対的支配者はすべて大文字の「父」であらんとした。

人間とはどうやら生まれ落ちたそのときから他者の承認を求めてやまない存在のようである。十九世紀ドイツのヘーゲルが唱え、二十世紀フランスのコジエーヴが ^①敷衍した「自己の欲望は他者の承認なしには満足できない」、「自己の欲望は他者の欲望を欲望する」という原理も、そんなに格別のことを言っていたわけではなさそうだ（ヘーゲル『精神現象学』、コジエーヴ『ヘーゲル読解入門』）。

母親に代表される周囲の愛情というかたちで一方的に承認をあたえられていた赤ちゃんの自己の欲望は、やがてその愛情を促し強化するためにみずから母親にはたらしかけられるようになる。母親が望むように行動することで、母親からの承認を確実なものにすると同時に、母親の喜びをみずからの喜びとして喜ぶことが出来るようになるのである。このとき赤ちゃんは、^②母親の欲望を欲望していると言っていていいだろう。この自分の自己をきちんと承認してもらうという幼児期の基本的な体験が、その後の自己を形成していくうえで大きな役割をになうのはいうまでもない。

このようにおとなのなかに生まれてきた子どもは両者の非対称的な関係のなかで自己を育てていくのだが、おとなに承認してもらいたいという子どもの希求はまだ欲望そのままの表現の段階にとどまっている。ふつうおとなには子どもの自己を承認してあげる余裕が備わっているし、子どもも自分を承認してくれるおとなに信頼の気持ちを寄せているから、両者の関係はかなり A 的だ。

しかし子どもの世界にもやがて横並びの異質な他者という存在に直面しなければならぬ時がやってくる。この不可解な他者を認めるのか認めないのか。むろん認めずに人間社会を生きていくことはできない。「承認」を互いに求めて交通・抗争するなかから次第に「相互承認」という暗黙のルールが生まれる（支配と従属というかたちも、それが安定しているかぎり、承認されたひとつのルールであることに変わりはない）。

ここにはじめの「倫理」が成立する。みずからの欲望を認めてもらい、「われ」という主体を承認してもらうためには、「われ」に承認をもとめる他者の「われ」という存在とその欲望をも承認しなければならぬからだ。逆から言えば、この相互承認のなかではじめて「われ」の輪郭もくつきりと浮かび上がる。この倫理の雛形はすでにおとなの社会に用意されているので、子どもはひとまずそのルールを受け入れ、^③内面化することが要請される。

では他者の存在とその欲望をみずからの存在と欲望にひとしいものとして認める（ルールをひとまず受け入れる）主体的な契機はどこにあるのだろうか。五分五分の打算なのだろうか。「万人の万人に対する戦い」を回避する手立てとして、やむを得ざる ^① ショチとして他者を承認するのだろうか。いや、そのような契機とは異なるレヴェルで、そのような契機に先立って、私たちはリハーサルを経てきているのである。

まず祖型（プロトタイプ）として存在するのは、かつて母親やその他の養育者とのあいだに築かれた関係である（そのなかには「父」的な権威に対する怖れの念も含まれているだろう）。幼児はまわりのひとの欲望を満足させることによつてみずからの欲望を実現させることを繰り返すなかから、お互いがお互いを承認するという人間関係のゲームを学び始める。この非対称的な相互承認の経験のうえに、ひとは友だち関係や恋愛関係という対称的な人間関係のゲームを経験していくだろう。このとき他者の欲望はしぶしぶ認めなければならぬ対象であるよりは、むしろお互いを認め合うことでみずからの欲望を満足させることができるひとつの可能性として受け止められるのではないだろうか。これが第一の情愛的な契機である。しかしこの情愛的な契機がそのまま社会的な契機に発展するわけではない。

^④ 第二の契機は言葉を使用することである。言語は話し手と聞き手のあいだに交わされる応答関係のなかでしか成立しない。もう三十年以上も前の話になるが、我が家に最初の子どもが生まれ、まだひと月ぐらいしか経っていなかった頃のことだ。勤め先から帰宅した私を待ち構えていたように、妻が目を輝かせて報告した。「××ちゃんはお利口さんなのよ。わたしにお話しするの」。妻が話しかけると赤ちゃんのほうでも口をすぼめ、ホーホーといって応答するというのだ。これがあとにも先にもわが夫婦の最も感動的な会話であったかもしれないのだが、しかしどの家族でもかならず経験する出来事であるだろう。言語それ自体は人間に生得的なものではないが、言語習得能力、あるいはそれ以前の応答

能力というものが生まれつき備わっていないければ言語を獲得することはできない。

言語という抽象的な記号体系は、人称代名詞の機能に象徴的にあらわれているように、自己中心の世界に止まることを許さない。対話の中で「私は」と語りだした語り手は、話し終えた途端におなじく「私は」と語りだすもうひとりの語り手の聞き役に転換している。この聞き手は次の瞬間にはまた話し手に変身し、話し手は聞き手に変身する。この相互性と対等性がなければ言葉によるコミュニケーションは成立しない。言語に備わったこの人称的世界は「私」という存在の相対性をしたたかに思い知らせてくれるのである。

(井崎正敏『考える』とはどういうことか？―思考・論理・倫理・レトリック』より一部改変)

問1 波線部⑦「カント」にあてる漢字のうち一字を含む語を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 国土をジュウカンする高速自動車道。
- ② 生涯をかけて難事業をカンスイさせる。
- ③ 困難な事態にもカントと立ちむかう。
- ④ 前言をテツカイして相手に謝罪した。
- ⑤ 古今東西のセントツの言葉を引用する。

問2

波線部④「シヨチ」にあててる漢字のうち一字を含む語を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 名僧によつて発見されたユイシヨある温泉。
- ② シヨハンの事情から公演が中止される。
- ③ シヨカンを述べることは差し控えたい。
- ④ 百貨店をユウチする計画が持ち上がる。
- ⑤ 駅前のホウチ自転車の撤去がだいぶ進んだ。

問3

傍線部①「敷衍」の意味として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 熟考を重ねて定義すること。
- ② 受け継いで考えを広めること。
- ③ 押し広げて詳しく述べること。
- ④ 批判して反論を展開すること。
- ⑤ 慎重に受け止めて検討すること。

問4 傍線部②「母親の欲望を欲望している」の説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号を

マークしなさい。

- ① 最も信頼を寄せる母親の欲望を受け入れることで、母親からの信頼を得ようとする事。
- ② 幼児期に健全な自己形成を図るため、自らの子であると母親から承認を得ようとする事。
- ③ 母親の望みに応じることで母親からの承認をさらに引き出し、より深化させようとする事。
- ④ 母親の喜びが自らの喜びと考えることで、自己の欲望を母親から承認されるようにすること。
- ⑤ 母親から承認される人物となるため、母親が望む行動を取り、人格を形成しようとする事。

問5 空欄

A

に入れる言葉として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 奇跡
- ② 決定
- ③ 暫定
- ④ 予定調和
- ⑤ 現実主義

問6 傍線部③「内面化すること」の説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしな

さい。

- ① 他者の存在を認めないという態度では人間社会を生きていくことなどできないということを承認し、それを実践すること。
- ② 自分と他者が各々の欲望をぶつけ合うことで相互承認が形成されていくことを理解し、それを積極的に実践すること。
- ③ 相互承認というルールによっておとなの社会が形成されていることを理解し、社会の一員となるため、それを受け入れること。
- ④ 他者の存在と欲望を承認することが、自己の存在と欲望を承認してもらうための条件であると理解し、それを受け入れること。
- ⑤ 自分と異なる欲望を持つ他者という存在を認め、他者との差異から自己という存在を帰納的に認識し、それを受け入れること。

問7

傍線部④「第二の契機は言葉を使用することである」の説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 他者の存在とその欲望を受け入れ、人間社会で生きていく契機として、対話を通じて互いを認め合い、自己の欲望を満足させていくという人間関係のゲームを経験していくということ。
- ② 他者の存在と欲望を受け入れ、倫理性を成立させる契機として、応答能力や言語習得能力によって言語を獲得し、コミュニケーションを成立させていく言語使用の実情があるということ。
- ③ 倫理性の担保された人間社会を形成していくためには、言葉を使用して、コミュニケーションを図ることを通して、他者の存在とその欲望を受け入れていかななくてはならないということ。
- ④ 相互承認のルールを受け入れ、人間社会で生きていくためには、養育者との対話という応答関係のなかで言語習得能力を養い、言語という抽象的な記号体系を得ていく必要があるということ。
- ⑤ 他者の存在と欲望を自己のそれと同等と認める契機として、養育者との間で交わされる言語コミュニケーションの素晴らしさに感動を覚えるような経験が乳児期に不可欠であるということ。

問8

本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 他者という異質で不可解な存在を受け入れずに人間社会を生きていこうとするならば、「万人の万人に対する戦い」を回避するためにも、言語によるコミュニケーションや駆け引きを通して、自己の欲望と存在を他者に承認させる必要がある。
- ② 幼児からの働きかけは幼児自身の欲望の現れであり、自らの欲望を十分に表現することが自己を形成していくことにつながっていくので、たとえば身勝手な要求と感ずても、養育者は決して捨て置くことなく、愛情を持つて応対すべきである。
- ③ 人間は言語を習得することで、言語が有する相互性と対等性によって他者の存在と欲望を受け入れるようになり、そうした構えを持つて他者と関わっていくことで他者との相互承認が形成され、倫理性というものが形成されていくことになる。
- ④ 赤ちゃんが生まれながらにして母親の欲望を満たそうとして働きかけるといふことは、筆者に最初の子どもが生まれ、ひと月ほど経った頃に、筆者の妻が赤ちゃんに話しかけたときのエピソードからも、それが真理であると認めざるを得ない。
- ⑤ 人間というものは、非対称的な相互承認の経験のうえに、友だち関係や恋愛関係といった対称的な人間関係のゲームを経験することで、他者の欲望や喜びこそが自分の欲望や喜びであることを実感し、情愛的な関係を形成していくものである。

第二問 次の本文を読んで、以下の設問に答えなさい。

飾りと命綱

教養は幸運なときには飾りであるが、不運のなかにあつては命綱となる。

このことばは、古代ギリシアの偉大な哲学者、アリストテレスが語ったと、デイオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』は伝えている。

「教養」と訳したのは、ギリシア語の「パイデイア」ということばである。「パイデイア」は、「パイス」ということばからの派生語で、「パイス」は「子ども」である。「パイデイア」は「子どもを育てること」である。から、^a「教育」という意味をもつ。ただ、古代ギリシアの人びとにとって「パイデイア」は、教育制度や学校のシステムのなかで「教え込む」教育、子ども ^bからみれば「教え込まれる」教育ではなく、人間の自由な精神が自発的に学び、みず ^cから身につける能力を意味した。

A

を意味したのである。「飾り」となり「命綱」となる教養は、強制的に

仕込まれたものではなく、人間の内面 ^dから輝く飾りであり、危機のときには自分の意思でそこ ^eから脱出しようとする自発性とともにある。から ^fである。そこで、「教育」というより「教養」のほうがふさわしい訳語である。

ただ、この本で論じることになる ^gが、現代においても「教養」と「教育」とは微妙な関係のなかにある。ここではひとまず、この本で論じる「教養」は、自ら身につけるといいう自発性にもとづく学びであり、そのように、主体的に学

ばれて身についたものが教養と考えておこう。

(I) また、「飾り」も意味する。(II) 「コスモス」には「宇宙」という意味と「秩序」という意味がある。(III) 「コスメティックス」といえば、化粧品である。(IV) さて、「飾り」というのは、もとのギリシア語でいうと、「コスモス」である。(V) 人を美しく飾るもの、という意味である。

人びとが幸運な人生のうちにあるときには、教養は、人の精神を秩序づける。その人柄を美しく飾る。ただ、人生は、自然法則に支配される自然現象と異なつて、幸運と不運のうちにある。同じ人間として生まれながら、富裕な家庭に生まれた子どもと貧困な家庭に生まれた子どもでは、「運不運」が違つたとわたしたちは言う。わたしたちは、自分の人生の「生まれ」を選択することはできない。

わたしたち人間が生きているということは、この地球上に命を与えられ、その命を ^(ア)イジっていくということを意味している。生まれるということは、命を与えられるということである。与えられるということは受け身である。わたしたちは自らの誕生を選択することはできないからである。

他方、わたしたちは命をつなぐために、たくさんの方を選択する。「選択する」ということは、「選択肢をもつ」ということ、B、「選択することができるといふことも意味している。複数の選択肢のなかから選択することができるといふことは、選択の自由をもつといふことである。選択の自由があればこそ、わたしたちは、複数の選択肢から自らの意思でどれか一つを選ぶこと ^(ハ)ができる。選択の存在こそ人間が自由であることの根幹に位置しているのである。

ただ、選択が望みの結果をもたらすかどうかは、選択の時点で分かっているわけではない。わたしたちは ^(イ)選択を誤

「誤る」は、数学の解答を誤るという意味ではない。正しい答えを出せなかったということではない。わたしたちは「正しい選択」という^①が、これは、数学の答えのような「正しさ」ではない。選択には、「よりよい選択」と「より悪い選択」、「どちらともつかない選択」がある。よりよい選択とは、わたしたちの願望の実現をもたらす選択、いわば幸福な状況をもたらす選択であり、そうでない選択が誤った選択、不幸をもたらす選択が悪い選択である。

さらに、よい選択をしたと思っても、選択の状況が変化するなかで不運が生じることもある。順調に進んでいた仕事^②が突然の地震で行き詰まってしまうこともある。わたしたちは、こういう状況を運が悪いとか、不運だとかいう。

選択を誤ることで、あるいは、不運に見舞われることで、わたしたちは困難な状況に陥る。困難な状況に陥ってしまったことの分岐点となった選択のことを「選択を間違った」とか、「選択が正しくなかった」、あるいは「選択はよかった^③が、運が悪かった」というのである。たしかに、「誤った選択」「正しくなかった選択」は回避したい。不運な出来事に^④出会うことも喜ばしいことではない。が、そういう選択をすること、そのような状況を生きることができるともまた、人間が自由であるということに含まれている。

選択、所与と遭遇

ここで命のように、「与えられているもの」を「所与」と呼ぶことにしよう。わたしたちは、与えられた命のもとで、C、所与としての人生のうちにあつて、選択する自由を与えられている。

所与と選択とが人間が存在するということの根本的な条件である。ただし、人生は、所与と選択だけによって成り立っているわけではない。人生には、所与でもなく、選択でもない広大な領域が広がっている。遭遇という領域である。

わたしたちは、人生のなかで、さまざまな人びとや出来事に出会う。遭遇する。この遭遇もまた「所与としての生きていること」と切っても切れない関係にある。所与をスタートとしてわたしたちの人生は進んでいくのであるが、そのなかでわたしたちはそれぞれにさまざまな人や出来事と出会うからである。しかし遭遇は所与ではない。選択でもない。

遭遇は選択ではないが、^(K)さまざまな遭遇は、他方でわたしたちにさまざまな選択肢を用意してくれる。人生の豊かさ、この所与と遭遇によって用意される選択のなかにある。いろいろな人と出会い、いろいろな出来事に出会う。人との遭遇、出来事との遭遇によってさらにさまざまな選択肢が現れてくる。そのなかの選択によって人生は変化してゆく。選択によって出会うさまざまな人や出来事や風景が人生の ^(ウ)イロドリとなる。

ただ、遭遇もまた、時として、さまざまな困難な状況をもたらす。自然災害との遭遇もあり、危害を及ぼす人間との遭遇もある。そうした遭遇で迫られる選択に失敗すれば、その結果は不幸な結果になることもある。死に至ることもある。

社会に秩序が存在し、平和を ^(エ)イジしている時代にわたしたちが生まれたとすれば、そのような状況もわたしたちの「所与」ということができる。そのような時代であれば、人びとは心安らかに暮らすことができるようにみえる。

D、そのような時代にも、人は時として困難な状況に遭遇する。戦争がなくても、人びとの間には対立や紛争があつて、ときには暴力に至る。DV(ドメスティック・バイオレンス)といわれる家庭内暴力や「いじめ」もある。

命の危機に遭遇することは不幸なことであるが、幸運に恵まれるだけがよい人生ではない。

E

、さまざまな

困難を克服すること、そのような克服を実現するための賢い選択を行うことこそが人生を豊かにする。困難な状況にあつてこそ、人間は賢い選択をすることができるからである。

命にかかわる危機のなかで何が人を救うことができるだろうか。アリストテレスの「教養は幸運なときには飾りとなるが、不運のなかにあつては命綱となる」ということばで、わたしがあえて「命綱」と訳したのは、ギリシア語の「カタフィゲー」ということばである。アリストテレスは、幸運なときの「コスモス（飾り）」と不運なときの「カタフィゲー」を対比させた。カタフィゲーは、文字通りには、「避難所」である。「避難所」は、危機のときに身を守る場所であるが、いざというときに身を守る力になるという意味では、むしろ「命綱」と言った方がよいと思う。これは、ほかの人が守ってくれる力という意味ではない。自らの心のうちにあつて、自分を守る力である。アリストテレスはそれが教養だというのである。教養は、自分自身のなかに形成された生きるための底力だからである。

（桑子敏雄『何のための「教養」か』より一部改変）

問1

二重傍線部①「から」と用法が異なるものを、②～④の中から過不足なく選んだものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① f
- ② b f
- ③ d f
- ④ b c d e
- ⑤ b d e f

問2

二重傍線部①「が」と用法が同じものを、②～④の中から過不足なく選んだものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① ナシ
- ② h
- ③ j k
- ④ i j k
- ⑤ i j k l

問3 波線部（I）～（V）の文は筆者の書いた順番と異なっている。（I）～（V）を正しく並べ替えたものとして最

もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① II—I—IV—III—V
- ② II—IV—I—V—III
- ③ III—I—V—IV—II
- ④ IV—II—I—III—V
- ⑤ IV—II—III—V—I

問4 傍線部（ア）（エ）「イジ」の「イ」に当てる漢字の偏と、傍線部に当てる漢字の偏が異なるものとして、最もふ

さわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 彼はコウチャにミルクを必ず入れる。
- ② その番組は若者の間にハモンを呼んだ。
- ③ 機械のカドウ時間を削減する。
- ④ 彼女の罪をキュウダンする。
- ⑤ フンソウ地帯に取材に行った。

問5

傍線部（イ）「選択を誤る」について、筆者はどのようなものだとやっているのか、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 数学の解答を誤るという意味ではなく、わたしたちの願望を実現した後に、幸福な状況をもたらす選択をせずに、不幸をもたらす選択をすること。
- ② 数学の解答を誤るという意味であるとは言い切れず、わたしたちの願望を実現し、いわゆる幸福な状況をもたらすかもしれない選択をせずに、不幸をもたらす選択をすること。
- ③ 数学の解答を誤るという意味とは異なり、わたしたちの願望の実現をもたらす選択、言うなれば幸福な状況をもたらす選択をせずに、不幸をもたらす選択をすること。
- ④ 数学の解答を誤るという意味であるとは言えなくもないが、わたしたちの願望の実現、いわば、幸福な状況をもたらす選択をせずに、不幸をもたらす選択をすること。
- ⑤ 数学の解答を誤るという意味と同じではなく、わたしたちの願望を実現した上で、さらに幸福な状況をもたらす選択をせずに、不幸をもたらす選択をすること。

問6

傍線部(ウ)「イロドリ」に当てる漢字の音読みと、傍線部に当てる漢字の音読みと同じ読み方がないものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 彼はフタタビ犯罪を犯した。
- ② 大学のモヨリ駅は梅ヶ丘だ。
- ③ 獵師がイノシシをトつてきた。
- ④ 布地をタつて洋服を作る。
- ⑤ 国道への道がフサがつている。

問7 空欄

A

に入れる表現として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 「教え込む・教え込まれる強制的な教育」かつ、「自由な人間が自ら身につけ学ぶ教養」
- ② 「自由な人間が自ら身につけ学ぶ教養」と異なり、「教え込む・教え込まれる強制的な教育」
- ③ 「教え込む・教え込まれる強制的な教育」ではなく、「自由な人間が自ら身につけ学ぶ教養」
- ④ 「自由な人間が自ら身につけ学ぶ教養」と同様に、「教え込む・教え込まれる強制的な教育」
- ⑤ 「教え込む・教え込まれる強制的な教育」でありながら、「自由な人間が自ら身につけ学ぶ教養」

問8

空欄

B

く

E

その番号をマークしなさい。

に入れることばの組み合わせとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、

- ① そして―まさしく―しかし―やはり
- ② さらに―つまり―なお―むしろ
- ③ また―言い換えれば―だが―やはり
- ④ そして―取りも直さず―そうはいつでも―だから
- ⑤ さらに―すなわち―しかし―むしろ

第三問

次の本文を読んで、以下の設問に答えなさい。

あらゆる書物は人の手に成つたものである。神意や天^①ケイを伝えたものがあるにしても、書物に化する一段になれば人の手を煩わさなければならぬ。だから書物は何よりも人間に似ている。

人の書物を作る目的は一様でない。しかしその目的の如何にかかわらず、書物は著者その人を現しているから妙である。偽善者は偽善者なりに、空威張の人は空威張なりに、自己の影を書物の上に落している。必ずしも文字の表現する意味を指すのではない。文字の表では立派なことを述べていても、子細に点検すればどこか㊦を露してしまふ。人焉んぞ瘦さんやというところがある。巧言令色や虚声偽涙が真に一世を欺き得ぬことは、人も書物も全く同じである。

書物の名は著者の性格なり趣味なりを表現する。もし命名者が他にあれば、その命名者の性格なり趣味なりを伝えるわけである。人の名前は自ら名乗るのではないから、少しく意味を異にするが、子供の名前には親の性格なり趣味なりが窺われる。書物の名は子供の名前に相当すべきものであろう。【I】子供に気取った名前をつける人は、どこか共通した厭味があるものだという説を聞いたことがある。装幀と服装との間にもほぼ同様の消息が認められるかと思う。一時天下の視聴を集めているかに見えるながら、忽ち消え去つて花火の如く跡をとどめぬものがある。人にしても書物にしても、これは流行型と名づくべきものであろう。【II】一世に持囃されるものが必ずしも真の人物でないように、洛陽の㊧を高からしむるものだけが名著ではない。「天下の人になへる事はやすし、一人二人になへる事はかたし」という芭蕉の言葉は、俳諧の上に限らるべきものではなさそうである。

名前だけ聞いて一向にぶつかる機会のない書物があるかと思うと、外観だけ熟知していて更に内容に接触せぬ書物がある。当代の名士なるものは概ね前者であり、通勤の電車や銭湯で始終顔を合せながら、遂に名も知らずにしまう人たちは後者に属する。いわゆる名著の中にも或年齢を経過すると、一読の機を失するものが少なくない。人生におけるえらい人の標準も推移を免れぬからである。

⑧ 芥川龍之介氏は「大道寺信輔の半生」の中で、二月ほど前に自分が売った『ツアラトストラ』を、漸く売った値段の倍まで値切つて買取る話を書いているが、こういう遭逢離散の趣は慥に人と人との交渉に似ている。対人関係の場合にはしばしば起りそうな世評が起らずに済むのは、一方の書物が意志や感情を持たぬためかも知れない。書物の所有者とこれを欲しがる人との間に生ずる経緯は、純然たる対人関係だから、問題は自ずから別になる。

人の書物に対する感情も、趣味の領分を超えると、往々にして偏執の境域に陥る。【Ⅲ】人の書物を借りて返さぬというようなことでも、多くの場合寛大に見られているが、対人関係であつたら必ず社会の問題とならざるを得ぬであろう。愛書狂と称される人々の中には、他人の書物に対して随分非常手段を辞せぬ手合があるらしい。盗は書を取らずというが、書を取るの盗は自ずから別にある。何事によらず盗の域まで病が昂ずれば、普通の交際が困難になるのは当然でなければならぬ。

書物と人間の類似は、算えて行けばいくからでも出て来そうである。【Ⅳ】漱石氏が『満韓ところどころ』の旅行を前にして胃を病んだ時、「眼を開いて本棚を見渡すと書物がぎつしり詰っている。その書物が一々違った色をして、そうして悉く別々な名を持っている。煩わしい事夥しい。何の酔興でこんな差別を附けたものだろう、また何の因果でそれを大事そうに列べ立てたものだろう。実にしち面倒臭い世の中だ。早く死んじまえという気になった」と書いたことであつ

た。書物に対して真に煩わしさを感じずる者は、読書家に限られている。没交渉な人々のように、雲烟過眼視うんえんかがんしてやむことが出来ないからである。これは人間に対する場合も同様であろう。馬太伝マタイを読むと基督キリストでさえ夥しい群衆に悩まされて、小舟を用意して置くことを弟子に命じている。【V】もし人間に対してかつて煩わしさを感じたことがないという人があるならば、書物に没交渉な人と同じく、常に冷眼にこれを^②カン過し得る人であるに相違ない。

(柴田宵曲「書物と人間」より一部改変。)

問1 傍線部①「ケイ」を漢字に直した時、正しいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 敬
- ② 刑
- ③ 警
- ④ 啓
- ⑤ 掲

問2 傍線部②「カン」を漢字に直した時、正しいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 看
- ② 管
- ③ 観
- ④ 感
- ⑤ 間

問3

空欄

㊦

に入る語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 馬頭
- ② 馬食
- ③ 馬耳
- ④ 馬具
- ⑤ 馬脚

問4

空欄

㊧

に入る語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 地価
- ② 物価
- ③ 紙価
- ④ 声価
- ⑤ 代価

問5

二重傍線部㊨「芭蕉」とあるが、芭蕉の句ではないものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 春の海ひねもすのたりのたりかな
- ② むざんやな甲かぶとの下のきりぎりす
- ③ あらたふと青葉若葉の日の光
- ④ 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る
- ⑤ 秋深き隣は何をする人ぞ

問6 二重傍線部⑥「芥川龍之介」とあるが、芥川龍之介の著作ではないものを次の中から一つ選び、その番号をマ

クしなさい。

- ① 藪の中
- ② 歯車
- ③ 地獄変
- ④ 苦の世界
- ⑤ 西方の人

問7 二重傍線部③「雲烟過眼」の意味として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 日頃の交際を結ばないこと。
- ② 物事に深く執着しないこと。
- ③ 無暗に入り込んでいくこと。
- ④ 何も見過ごしにしないこと。
- ⑤ 我を忘れて立ち尽くすこと。

問8 本文からは次の一文が脱落している。【I】から【V】のうちで、どこに挿入するのが最もふさわしいか、選択肢

から一つ選び、その番号をマークしなさい。

【あるいは一部の書物を成す位はあるかも知れぬが、それだけまた平凡なことだという結論にもなつて来る。】

- ① 【I】 ② 【II】 ③ 【III】 ④ 【IV】 ⑤ 【V】

問9 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 書物に対する評価の基準は、評価する者の年齢に応じて移り変わるものである。
 ② 夏目漱石と書物との関係こそが、人間と書物との理想的な関係であるといえる。
 ③ 表面をきれいごとで取り繕った人物が、多くの場合世間で持て囃されるものだ。
 ④ 人間と書物とが類似していることについて、芥川龍之介は作品の中で指摘した。
 ⑤ 書物を返却しないことは罪とはされないが、度を過ぎた収集は慎むべきである。